

5-7 ウエペケレ「アロヌマンノチュー トウレシヒ イカオピ ユーキ」解説

語り手：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：息子が一人あり、夫がある、何不自由ない良い家庭の私は主婦でした。夫も非常に猟の名人、そして子供ももう今ではやや一人前に狩りをするぐらいになった家族で、何不自由なく生活しておりました。

ある日のこと、夫と息子は山へ狩りへ出かけて二～三日した。そしたら、子供が山から帰ってきて、父が山へ行っており、家へ帰って母に言ってお餅をついてもらって来いと、そのように使われましたので帰ってきましたよと。

そのように言いますので、大あわくいで〔大慌てで〕、昔風のその *iuta* をして、搗き物をしてですね、それで団子をどっさり作って荷物を作り、そしてその息子に案内されるままに、山をさして歩いて行った。

そうするといつもと違って、いつも行くその *iwor* というのはその、猟をする場所ですけれども、いつも行く場所とやや違うようなところへ歩く。

それにしてもまあそちらの方へ行ったのかなぐらいな調子でずっと後へついて行って、さっぱりそのいつもの場所とも違うようなところへ行って、もうやや日暮れも近くなったので、困ったなと思いがらいると、息子の言うのにはここでちょっと休みましようと言って、ちょっとした茅原のようなところへ、まあ座って、まあ一服したと。

そしたらそこの茅原の中でも、一つの茅の根からも分蘖（ぶんけつ）したようにさっと一か所で生えてる茅原のところへ荷物を降ろし、そして私の荷物もそこへ降ろして休んだ。で、ちょっとそのおしっこをしたいので、そのところから離れたところへ行って用をたして、元の場所へ戻って来てみると、もう息子はどこへ行っちゃったのか見えない。

そうなって良くそこで考えてみると、いつもの場所とまったく違う、見たこともない、行ったこともないような場所なので、途方に暮れてしまったと。けれども荷物があるんで、荷物だけ背負ってその辺ちょっと歩いてみると、ずっと向こうの方へ家が一軒見えた。その家には人が住んでお

るらしく、煙が見えるので、そこへ入ったと。

そして外から誘いをこうというか、外でこう、自分でこう入る前に咳払いをして中の人に、人がお客として来ましたよという知らせ方があるんですが、それでも中からは出てこないで、中から声があって、「外へ出る人もいませんからどうぞお入りください。」そう言われたので、**reye kane sinu kane** [這ったりずったりしながら] という言葉で表現されておりますが、本当に這うようにいざるようにして家の中へ入った。そしたらそこ最初は **aronumannociw** [宵の明星] がいるんだな？

貝澤：うん、うん。

萱野：入ったらば、そこで立派な女の人が一人で **kaeka** という、その糸を撚り撚り座っているわけですが、昔の家であれば、まあお婆さんたちそうやっておったわけですが、こう又になった木、さらに両脇の枝がまた双方同じに又になった **kanit** という糸撚りの道具があるんです。道具というより、寄った糸をかける道具ですが、それをこう炉端へぎゅっと挿して糸撚りしながらおって言うのには、「さあさあ休みなさい」と。

「あんたのここへ来たのは、全部私は火の神様からの連絡があって知っていますよ。私は **aronumannociw** といって宵の明星の女神です」と。「けれどもあなたのこうやって来たのは、その今さっきまで一緒に歩いていたのは、あなたの息子ではなくて、化け物があなたの息子の顔、形そのままにしてあなたを化かしておったんだと。そして自分の住んでいるところまで連れては来たけれども、あとどうすることも出来なくて、その化け物はそのまま消えてしまったが、あんただけは残ったけれども、だまっておくと危ないことになりそうなので、私のところへ呼び寄せたんですから、どうぞ、どうぞ入ってお休みなさい」と。

「そして、ここではどうにもならないが、私の姉神である **nisatcawot** という明けの明星の女神が、これから少し上流へ行くとそこでおるから、そこへ行って、さらにあなたの行先を聞かないと、あなたの家へ帰ることは出来ませんよ。けれども注意して行きなさい」と、言われましたので、私はまださらに自分の荷物を背負って川をずっと辿って上って行った。

そうするとそこで、明けの明星の女神の家がありまして、まだ入ってみると、なるほど、先ほどの人よりはいくらか年寄りらしい女の神様がおって、いろいろと教えてくれ、そして「今晚は泊まりなさい」と言いながら一つの宝物を授けてくれた。それは **mour** [女性の肌着] らしき、肌着かなんかそんなような物をくれたので……

貝澤：an kaske ore [その上に乗せる] っば毛氈(?)

萱野：そういうのを貰って生きることによって、あなたは今後とも運のいい人になるからと言ってその肌着をくれたので着ると、それが体内へ沈んでしまったと。

そして、まあその晩は泊めてもらって、次の朝は自分の家へ帰る道をよく教えてもらって、自分の家へ帰ったと。そしたら二～三日して夫と子供が帰ってきて話をすると、それは本当に大変でしたねと。本当に大変でしたと。これからそういうことがないようにと。まあお互い注意されたりしたりしながら、お互い無事であった事を喜び合ったと。

そして私の夫は inaw [木幣] を上手に作るので、その inaw を作って、神様、それぞれ世話になった神々へお礼に送ったのを私は耳でよくそれを聞きました。その後、長男にも嫁が来て非常に幸せに暮らしましたと。

そういうことで、若いときに宵の明星の女神、あるいは明けの明星の女神に助けられました、今ではとても幸せに暮らしておりますと、一人の女が語りました。

うん。これは珍しい uepeker [散文説話] だね。

貝澤：うん。asitomap [化け物] あの、sinkep mototo [ハギの根元] ……あの、rapempe ousikehe wa [茅の根元から] いいかみさん osinapte na(?), つていう isoytak [物語] を聞いたもんだ。

萱野：あー、なるほどね。